

金澤周作編『海のイギリス史——鬭争と共生の世界史——』

田中きく代

海の歴史は魅力的である。人々にとって海が異界であった時代から、海は人間の歴史を規定してきたが、歴史学において、その重要性が理解されるようになったのは、ごく最近のことである。一国史を超えて、広域の歴史を描きたいという歴史学者の思いは、なかなか実証研究の上では難しかったが、ようやく最近になって、海への関心によって達成されるのかもしれないと思える。世界史における海への歴史関心は、単なる交易史や海軍史を超えて、地中海、インド洋、東シナ海、そして大西洋など海域の歴史に向けられているが、こうした Maritime History は大洋とともに、カヴァンターやレディカーが述べるように、海と陸の間に

住む海民の多面的な日常の生活にまで及んでいる。

本書は、イギリスの近世・近代を中心に、他のヨーロッパ諸国と比較しながら、大西洋海域での、海の歴史の可能性を万華鏡のように見せてくれるものであるが、編者金澤氏の思いはそれだけにとどまらない。従来の歴史学を、「陸」の視点から見た歴史とすると、海の視点は、陸の視点からの歴史を補完するものもあれば、修正を迫り改変させるものもある。さらに、まったく新しい歴史空間を提示するものもある。本書の、それら全ての可能性を示し、よりグローバルな歴史学への、また新しい歴史学を刷新する研究モデルを提示しようとする心意気に喝采を送りたい。また、幾

層もの仕掛けを設けることで、こうした可能性をできうるだけ示そうとしていることも評価される。この書評で、その仕掛けのいくばかりかでも、紹介することができればと考えている。

一

本書は、イギリス史を中心に、海に関わる研究者たちの長年の研鑽によるものであるが、単なる論文集ではない。「いかに歴史学を面白くするか」を、世界史を学ぶ学生、初学者、そして、おそらく研究者にも問うたものである。ここで、本書の内容に移りたいが、それは総説と、第一部「光」、第二部「影」、第三部「反射」から構成される。まずは本書の問題提起を紹介し、共通理解を深めるために総説から始めたいが、その内容が詳細で重層的なものであるので、少し紙幅を割いて、編者の意図を可能な限り明示したい。

総説は、「歴史学をおもしろくするために」、まさにどうしたらいいのかという挑戦的な質問から始まる。そして、「歴史学、それは、知られざる過去の人間の営みを、現在の地点から、可能な限り確かな証拠と可能な限り飛躍のない

論理に基づいて再構成した上で、現在を生きる私たちの歴史像に一石を投じる学問」であるから、面白くないはずがないと、続いていく。その思いは、全体史を志向しながら、政治史、社会経済史、社会史、文化史と展開してきた現在の歴史学に向かっていよう。現在の西洋史学は、あまりにも細分化されすぎ、全体の見取り図のようなものが描けなくなっていて、どこか隘路に陥つてもがいているところがある。編者や著者たちには、海の視点から人間の歴史を見直すことで、この現状を打開し、新しい歴史学の潮流を生み出したいとの思いがあるのだろう。

編者が海の歴史に可能性を見出しているのは、イギリス史の事情もある。イギリス史の叙述には三つの「二重性」があり、多くがこれらの二重性によって引き裂かれているという。三つの二重性とは、①ローカルな歴史とグローバルな歴史、②陸の景観と海の景観、③クルーソー的イギリスとガリヴァー的イギリスであり、この三つの二重性を統合できるのが、海の歴史であるとしている。第一の二重性は、国内史（あるいはローカル・ヒストリー）と帝国史の間が乖離傾向にあることで、これをいかにして架橋するかという問題提起がされる。第二の二重性は、陸地中心の歴史

観は、海の歴史の持つ多様な可能性を受け入れる余地が少なかったという指摘で、どのように、海の歴史を取り入れるかが問われる。第三の二重性については、従来はクルーソー的な、強国イギリスを述べるものが多かったが、イギリス近世・近代の、ガリヴァー的なもう半分の「弱い」、ずっと不安定で、脆弱、失敗を重ねる物語の歴史にも、耳を傾けなければならぬとの問題提起がある。

こうしたイギリス史叙述の抱える複数の二重性を、包括的に解消するのが海の歴史である。つまり、イギリス史の抱える問題を常に念頭に置きつつ、その三つの二重性を、海の研究の中に収斂させ、強いナショナルな海の歴史（陸域の延長のような歴史）と、弱いローカルでグローバルな海の歴史（海域の相対的な自律性を強調する歴史）の共存をはかることで、解消させようとしている。二重性を克服し、イギリス史の総体を描き出す道筋を見出す上で、手堅いアプローチであると言えよう。

具体的には、①主体のモザイク、②海の類型、③表象と言説、④接続と世界史に関する心構えを述べている。ここでは、これらのうち最初の三つの点について説明しておくたいが、第一の点では、海の歴史にかかわる主体をなるべ

多く掘い上げると述べている。先行研究を参考にしながら、零細農民、流刑者、年季奉公人、宗教的異端者、海賊、労働者、娼婦、兵士、船乗り、奴隷といった主体に留意するのみならず、それらの間の「緩やかなネットワーク」を重視している。本書に関しては、「非イギリス人や女性、密輸業者、難破船略奪者、私掠船、商人、探検家、科学者、自治体、政府といったところから、商品、自然、制度、組織、法に至るまで、歴史の舞台に登場する諸主体を網羅的に紹介しているので、新たな研究を刺激する素材として利用してほしいという。

第二の点では、海はただそこに存在している一様な存在ではなく、「人間の行為や考えが切り分けたり色付けたたりする空間」で、それらによって独特な個性を持った海域ができるという点が強調されている。また、近世から現代に至る過程の欧米人の海洋観の変遷を、インド洋型、ミクロネシア型、地中海型の三類型に分類した先行研究の紹介も、海洋観の構築を考える上で示唆的である。第三の点では、「海の歴史にまつわる多くの相対的に堅固な「事実」を紹介するが」、そのみならず、「より曖昧で不正確な表象や言説」にも注意を払うとある。ここでは、公的な文書から、ナラ

タイプなもの、フィクション性のあるものまで、さらにフォークロアやその他の語りなど、様々なテキストが史料として示唆されている。こうしたテキストを文学の「ニューヒストリー」とは異なる、きわめて歴史学的に利用する方法の構築にも目配りしている。

纏めてみれば、編者の言うように、「イギリス史叙述には含まれている三つの二重性の分裂状態を再び統合し、より妥当な歴史像をつくっていくために、無数の主体が織りなし、事実としてあるいは認識として、ローカルからグローバルの規模で多様に構築される海洋空間で展開する海の歴史を、事実のみならず表象の集積として提示」するということになるだろう。

二

本書では、各章は、総じて、基礎的情報の提供とともに、先行研究の論点、今後の研究の方向性が示されるとあるが、ここで、個別の章の紹介に移り、評者の関心もつけ加えて、特筆すべき点を明示していきたい。第一部「光」は、概して海の歴史でイギリスの「強さ」をあらわす側面を扱う四つの章から構成される。第一章は、石橋悠人氏による「探

検・科学―「未知なる世界」を目指して」である。一六世紀以来の探検航海の主要な目的が、新しい「知識」を得ることにあり、それが商業や植民活動および国家間の競争で優位に立つための貴重な情報となったこと、その学術的調査により科学や学問の発達にも大きく貢献したことが力説されている。記録のために伴われた画家たちの存在など、多様な探検者像も見える。また、海図や航路開拓、経度測定などの航海術における技術発展の歴史が論じられている点には有益な情報であった。さらに、現地の文物を持ち帰った啓蒙主義的な博物館などに、帝国史の中で、グローバルなところとローカルなところの接合関係が見出せることも刺激的であった。

第二章は、薩摩真介氏による「海軍―「木の楯」から「鉄の矛」へ」である。イギリス海軍の組織や軍事力、その構成員の実態や戦争での役割などが論じられている。特に、軍艦の中の社会における多様で複層的な諸相を垣間見ることができたことは有益であったし、蒸気船の導入が、単なる操船上の問題だけではなく、船の中の社会の変革をもたらしただけを実感した。さらに、当たり前のことながら、フォーンブローアやボライソの海洋冒険小説で知りえていた

世界と、実際の海軍の世界はかなり異なるのであるが、そうしたフィクションの中にも、軍人や船乗りの船を下りた社会などを伝える言説があるかと思えた。

第三章は、坂本優一郎氏による「海と経済―漁業と海運業から見る海域社会史」である。イギリス経済の根源である海運を巡る歴史と、漁業に関する歴史学上の可能性を提示している。漁業では、海と陸が接する部分の社会にも注目し、そこでの経済活動や、その主体として子どもや女性へのまなざしもあり、多面的な海民の考察に刺激を受けた。

ただ、漁業はもつとイングランドを越えた枠組みで示す必要があるかとも思えた。特に、長期捕鯨は、船上社会の説明と同時に、少なくとも北大西洋全体の中で説明せざるをえないテーマである。その点、海運業では、グローバルなものと同ローカルなものに成功していて、「政治や経済の大きな動向を踏まえつつ、現場の人びとの日常の具体的な生き方に注目するアプローチは、諸海域を接続する有力な手法となるであろう」という提言が説得力を持つ。

第四章は、林田敏子氏による「港―「繁栄」の光と影」である。イギリス本国や植民地あるいは交易先の港、特にロンドンに注目して、港の意義を考察している。検疫や海

上交通の要である灯台をめぐる政治にも及んでいる。様々な条件下の港と、それらに関わる様々な主体が示されている、総合的に港の存在を理解することができた。ただ、副題が示しているように、情報としては「光」と「影」の両側面が描かれており、「光」よりも「影」の部分の方に関心が向いた。

第二部「影」は、第一部の光に対して、「影」の面、すなわちイギリス史の本流から外れるような、イギリス史の「弱い」面が扱われる四章からなる。第一章は、金澤周作氏による「海難―アキレスの腱」である。船の難破に注目し、それが及ぼした経済、政治、文化への影響について論じている。また、海難に関する質的データと量的データを具体的に示しながら、それらの検証方法にも言及している。主体の行為の面でも当時の言説の面でも、読者の理解を深める工夫がなされていることが特筆される。

第二章は、金澤周作氏による「密貿易と難破船略奪―境界線上の世界」である。公式の貿易の外で根強く行われてきた密貿易の実態、その経済的影響などと、沿岸住民の難破船略奪の慣行と公の法との対立的関係などが解説される。密貿易や難破船略奪の慣行が、公権力によって囲われ、社

会的犯罪へと変化する過程で、それらに関わった主体たちは、一枚岩ではなかった。改めて、複雑な諸相の衣を、一枚一枚剥がしていく必要性を再認識した。

第三章は、薩摩真介氏による「海賊―「全人類の敵」?」である。海賊行為の実態と、ナショナルな権力との対峙について書かれている。海賊とは何かを問うことは史料的には難しいが、通史としての海賊理解ではなく、特定の時代の特定の地域の歴史の中で、海賊と海賊活動を客観的に把握することが今後なされなければならないことを実感した。

第四章は、薩摩真介氏による「私掠―合法的掠奪ビジネス」である。近世・近代の海上貿易に影響を与えた私掠船の実態が示されていて、歴史的に把握しにくい私掠について全体像を描くことができた。海賊と私掠の区別などが論じられていることも理解に役立った。関係ないと言われそうだが、刺激を受けて、東インド会社と私貿易商人の関係など、国家と私掠、私掠と海賊と同じような図式で捉え直し、総合化できないかと思えた。

第三部「反射」は、イギリス以外の地域の事例によって、上記のイギリスの状態を、相対化する五章が設けられている。ポルトガル・スペイン、フランス、オランダ、中国に

おける海の歴史からの照射を示すものである。他の地域の研究者には批判もあるが、イギリス以前に覇権を握っていた国々と、イギリスの三角貿易の拠点であった中国が取り上げられていて、他地域との比較という点では一定の評価ができる。

第一章は、君塚弘恭氏による「近世フランス経済と大西洋世界―商人と船乗りの海」である。長らくイギリスとラヴィアル関係にあったフランスでの経済的、社会的な海が存在について、商品の流れと供給・消費市場の広がり、海上輸送、アクター（主体）と、第一部や第二部と比較対照できる記述がなされている。イギリス以外で、海事史研究がもっとも進んでいるといえるフランスでの研究状況も示されている。

第二章は、阿河雄二郎氏による「近世フランスの海軍と社会―海洋世界の「国民化」」である。これもフランスを扱ったものであるが、創設期の海軍を取り上げている。それによる海岸部の社会の軍事化が、海の国境線を明確にし、海洋世界の「国民化」をもたらしたことを説いている。また、海軍創設を通して、それによる沿岸部の構造的変革と、そこでの日常生活の変貌にも言及している。さらに、諸国

間の関係史の視点を提起することで、イギリスの事例との接続を示唆している。

第三章は、合田昌史氏による「ポルトガル・スペインと海―「発見」の時代の先駆と挑戦」である。イギリスの海に先立つイベリアの海の歴史についてである。アジアへのふたつの航路である「ヴァイキングの路」と「コロンブス航路」について、世界分割を経て、交易拠点帝国が形成されていく様相が説明されている。また「影」の部分とされる海賊や私掠、海難などについてもイベリアの海での状況が述べられていて、イギリスの事例との対話ができるようになっていく。

第四章は、大西吉之氏による「オランダと海―偉人・英雄から水夫と妻へ」である。イベリアの海とイギリスの海をつなぐ位置にある、オランダの海の歴史を紹介し、イギリス、フランスのみならず、オランダの歴史学界でも、海軍史への関心がテーマを多様化させている状況が語られる。たとえば、一般の船員や水夫、その家族などに研究関心が向けられていることが示されているが、特に、連合東インド会社の船員の妻に関する研究には、今後の研究の広がりを見せるものがあった。

第五章は、村上衛氏による「近代中国沿海世界とイギリス―海賊、海難と密貿易」である。西洋に対して重要な提言を含むもので、西洋のアジアへの進出、特に第二部と重なったのが論じられる。それを通して、清朝がイギリスなどの西洋諸国を利用して沿岸部の諸問題を解決していた側面があったこと、イギリスの影響力は大きかったが、開港場に限られていたことなど、西洋、中国ともに、それぞれ一辺倒ではない歴史を見出す可能性を再確認した。

さらに、本書の魅力は、多くのコラムが語る海の諸相にもある。コラムといっても、それぞれが論文になるようなテーマが二〇も並んでいる。今後の展開を願って、題目だけでも記しておきたい。「水中考古学」（合田）、「海洋の類型学―海洋構築論」（金澤）、「海へ向かうイングランド―ハクルートとその著作」（川口美奈子）、「帆船の時代と造船学の誕生」（石橋）、「文化から見る英独建艦競争―リューガーの研究を中心に」（矢吹啓）、「日露戦争とイギリス―開戦前夜の軍艦転売交渉と回航」（矢吹啓）、「旅客船」（坂本）、「近代ドイツ海運と移民」（クラウス・ヴェーバー）、「フットボールの世界展開と港湾都市」（藤井翔太）、「明治日本の海難対

策―ふたつの「規則」とイギリスの影響」(金澤)、「世界の沿岸警備隊」(金澤)、「マリタイム・コミュニティ」(笠井俊和)、「東南アジアの海賊とヨーロッパ勢力」(太田淳)、「悪魔を突き付けるような」インド洋西海域の奴隷貿易廃絶活動」(鈴木英明)、「イギリス領北米植民地の貿易」(笠井俊和)、「スウェーデンと海軍―「軍事革命」を支えたもうひとつの軍事力」(古谷大輔)、「リスボンの大地震と津波」(合田)、「オスマン海軍の栄光と黄昏」(小松香織)、「近世フランスの海民の信仰生活」(阿河)、「アーサー・ランサムと海」(西川杉子)である。

また、末尾に附けられた豊富な参考文献は大いに役立つものであると、付記しておきたい。

三

総説ならびにそれぞれの章の内容を紹介しながら、特筆すべき点について述べてきたが、ここで、①海の歴史の限界、②三つの二重性と、「光」と「影」、③本書の対象とする読者について、コメントと若干の批判を述べたい。無いものなだりのものや、評者の不明さによる不適切なものがあることと思われるが、前もってお許しを乞うておきたい。

さて、第一の海の歴史という射程についてであるが、本書を読んで、海に対して同じ関心を持つ者として、海の歴史の可能性に心踊る気持ちを抑えることができない。今、評者の研究の中にどのように活かすことができるかにも思いを巡らせている。しかし、その上であるが、海の歴史は万能ではない。海の歴史に限界があることは共有しておくべきだろう。確かに、海の歴史は陸の歴史に対して強烈な批判となりうる。編者が述べるように、イギリス史の現状の打開に貢献するだろうと思われる。ことに、海と陸の間の地域で活動する人々の、海民的要素と陸民的要素の相互的關係の検証は、「開放的な」別の世界の人々の多様な活動を教えてくれ、陸の世界にもそうした別の空間が存在することを想起させる。だが、それは、陸の歴史の可能性を広げても、その批判は直接的なものではない。

また、海の歴史は、説明概念としては魅力的であるが、方法論を具体化するのが容易ではない。このことも、海の歴史が克服すべき限界であろう。本書においても、その方法は多様である。対象を絞ることはできるが、海賊の歴史に見られたように、それを時代の文脈で適切に把握することが難しいものが多い。本書の魅力は、イギリスを中心に海

洋世界の歴史を見出し、そこに見られた事例を示すものを類型化し、他地域の海域の歴史とつなげる方向性を示していることにあるが、モザイク的に並べた様々なアクター群と、それらの間の穏やかな関係を見るところの方法は抽象的である。このあたりで、なにか、方法論と結びつけるための、概念の精査が必要ではないか。

分析概念という点に関連して、個別の章のテーマの展開でも、もう少し研究方法の具体的な方法に関する説明が必要ではないかと思える。もちろん、章ごとの先行研究の紹介で、ある程度果たされているし、章によっては詳細に紹介しているものもある。しかし、全体として、情報提供に重点がおかれ、方法論の説明が少なくなっている傾向がある。少なくとも、海の歴史研究に必須の、学際的方法についての具体的な説明は、もっと必要ではないか。文化人類学、人類学、社会学などのみならず、心理学などの援用方法が適宜説明されている方が、特に学生や、初学者にとっては、有益であろう。

第二の三つの二重性と「光」と「影」は、構成上の点でのコメントである。編者の指摘する三つの二重性には説得力があり、それを海の歴史の中に収斂させようとしたこと

は高く評価している。そして、「光」、「影」、「反射」として構成した理由も理解している。謙虚に歴史に立ち向かい、その時空の総体を描くに際して、「光」の部分と「影」の部分を平等に置き、しかも他の地域の事例と対照させようとする、きわめて客観的かつ禁欲的な態度は心から歓迎する。これこそが学生や初学者の人たちに伝えたいメッセージであつただろう。

ただ、結果として、「光」と「影」との区別が、読者の理解を難しくしてしまったのではないかと思える。「光」と「影」は現実には重なり合っていて分ちがたい。また、章によつて、「光」と「影」の認識に相違が見えることも、理解を難しくしている。「強い」、「弱い」という表現も、そこに込められたものが、思いのほか学生には届いていないのではないか。「光」と「影」へのこだわりを別の仕方ですすことも可能ではなかったか。あくまでも、ひとつの対案としてではあるが、それぞれの章で、最初に少し「光」の部分を示し、その後で「影」の部分に比較的多くを割くというやり方もあったのではないかと思える。第三部が分かりやすいのは、そこでは「光」の部分が比較的多いもの、一つの章の中で、「光」と「影」を扱っているからではないか。

これは、第三の、本書は誰を対象とした本であるかという点とも関連している。「全ての読者に」という思いがあったのだろうか、それとも特別の読者層が想定されていたのか。大学で学生を教える者にとっては、優れた教科書かつ研究ガイドのようなものが欲しいという思いがある。ことに、海の歴史を教えるには、日本語の通史的なものさえほとんど存在しない状況であるので、通史、先行研究、海の歴史の有用性、今後の展望を網羅した一冊の本が欲しいという気持ちも評者にはある。だが、教師の指導にもよるが、学生の独習の教科書としては情報量が多すぎ、学生のキャパシティをやや超えているかと思う。

また、これを、大学院生にというと、情報の部分や先行研究の解題の部分は面白いだろう。そこから、自らのテーマを見出し、膨らませることも可能にするような優れた入門書である。だが、大学院生にとっては、読み返すうちに、今後の研究の可能性に関心が移るのではないか。本書は、今後の研究の広がりも示しているが、紙幅の都合で、それを Further Readings 的に、羅列的に並べざるをえなかったところがあるのではないか。海の歴史の多面的な諸相を接続していくには、接続のためのもう少しきめ細かい説明があっ

てもよかったのかと、思える。

さて、いくつかコメントや批判めいたものを述べてきたが、本書が歴史家の行いうる可能性を可能な限り広げた研究であることを再び強調しておきたい。評者の批判の一部でも的外れでないとしたら、本書がそれだけ刺激的な研究成果を可能な限り集めた本であったからである。多くの学生にとっても、研究者にとっても、大きな財産を得た。大洋を亘る歴史に漕ぎ出ようとする者にとって、優れた導き書が出たことを共に喜びたい。この労作が、新たな「新しい歴史学」を生み出す牽引車となることを、祈っている。

余談であるが、本書を読み終えて、コラムにあるアーサー・ランサム of 著作に感動し、ウォーカー家の子どもたちを真似て船に乗り、「ペミカン」を食していた時があったことを思い出した。歴史家としては、無批判に帝国のグローバル化の仕組みに乗せられていたかと嘆息するとともに、評者自身が海の歴史の中に漂浪する客体という主体であったことを痛感した。本書の二〇のコラムは、硬軟取り混ぜて、海の歴史について、いろいろと考えをめぐらす契機を与えてくれたことを追記しておきたい。

金澤周作編『海のイギリス史―闘争と共生の世界史―』（昭和
堂、二〇一三年七月刊、A5判、三七六頁、本体価格二、八
〇〇円）

（たなか きくよ・関西学院大学文学部教授）

